

## 卷頭言



# 一の肥やしは

## 丑込幸男

だまりの恋しい先日の昼下がり この道二十年という菊作りの知人を郊外に訪ねた。三十程もあるうか 黒い鉢は三列に並べられており、一枚 の葉の少しの変化も見逃すまいと慎重に見て回る懸命な彼の背を、秋の太陽が斜めに照らしていた。

“菊作りは土作り”といわれ、冬の 培養土作りにはじまり、年間の栽培計画がたてられる。錦秋の菊花展を飾る 色・形さまざまな花は、菊作る人の長 期にわたる細やかな愛情の結果なのである。

で遊ぶ子供の姿があまり見られなくなつた。夕焼けのあかね雲が黒ずみ、夕餉の匂いが路地に漂うころ、あしたを約束して指切りをする長い影法師は、テレビの映像の中に吸 取られてしまつたのであろうか。

遊びの時間は、子供たちが自由に使える時間である。彼等は、その場所にむく遊びを工夫し、友だちと作った約束を守りながら、限りない自己表現に時のことつのを忘れる。うまくいった時は有頂天になつて踊り、いさかいの後味の悪さは、つき合いのしかたを反省させる。——だのに、子供たちは家に引きこもつたまま出ようとしない。

んばかりのあぜ道で、奇妙な光景に 出合つた。カバンを背負つたままの数人の少年が、なにやら大声で叫

その傍らには、日焼けした老人が、手拍子をとりながら、これまた妙なしぐさをしている。聞くと、郷土芸能の伝承グループの少年たちが、学校帰りに指導を受けていたのだという。小柄な好々爺は、獅子舞の先生であつた。そういうえば、菊作る彼も、招かれてクラブ活動の指導をしているといっていたし、クリーン作戦の先頭に立つ若者やスポーツのリーダーも多く見かけようになつてきた。それぞれの特技を出し合つて、子供たちに声をかけようとする人が少しづつ増えてきている。町内の世話好きなおばさんも、頑固なおじさんも、ほんとうは、みんなが声をかけたがつてゐるのに、若い母親や遊びを知らない子供たちが、それをこばんでいるのではないだろうか。

町内の世話好きなおばさんも、頑固なおじさんも、ほんとうは、みんなが声をかけたがつてゐるのに、若い母親や遊びを知らない子供たちが、それをこばんでいるのではないだろうか。

作る人たちの間で“一の肥やしは主の足あと”といわれている。見回ることの大しさをいつたものである。あしきげく苗床や鉢を訪れ、生育が悪ければ、なぜかと思案し、害虫には早目に手を打つのである。

心豊かな青少年を育てるために、親も教師も、そして地域の人々も、それぞれの立場から“一の肥やし”は何かを改めて考え方直してみたいものである。

彼の丹精こめた菊は、今年はどんな花を開いてくれるだろうか。

(うしごめさちお・県社会教育課長)